

# ダーリンズ

—そうしてみんな  
生きている、でしょ？—

## マツクあつこ

やっと眠った……。美月は六カ月になる娘の寝顔に見られた。天使の寝顔。見ているだけで疲れが取れるようだ。

夫の駐在でシドニーに移って一カ月になる。憧れていた海外生活。三年か四年か。英語も学べるし、いい経験になるだろう。自分にとっても、子どもたちにとっても。

そうだ、純は？ 沙希がお昼寝をするからと追い払ったけれど、もう一人の天使の様子も見てあげなくては。

そう思ったとき脳天をつんざく悲鳴が上がった。

「ウギャー、ママ、血が出ちゃったよお！」

純がばたばたと寝室に駆け込んでくる。とたんに沙希が、火がついたように泣き出した。

ウソでしょ……。純の泣き顔を見たたんクラクラした。また余計なこととして。あ、Tシャツにまで血が！

「おバカ！ また鼻くそほじったでしょ！ ママ、お鼻ほじっちゃいけないって、いつも言ってるのに！」

純を横にして、鼻血と鼻クソで汚れた鼻腔にティッシュを突っ込んで、大泣きしている沙希を抱き上げる。やっと

眠ってくれたと思ったのに、泣きたいのはこつちだ。

自分の方が癩癩を起こしたいのを堪え、赤ん坊をあやしめながら、鼻血で汚れたTシャツを着替えさせようと四歳児の腕を引っ張って子供部屋のある二階へ上がる。

「いやだ、おじちゃんがいるよ」

階段の途中で、純にぐいと手を引っ張られた。

「何言ってるの、純。おじちゃんなんていないでしょ。」

ほら、早くなさい。ママは忙しいの！」

「やだ、おじちゃん、いるもの。ほら、そこ」

怯えたように階段の上がり口を指差して、歩こうとしない息子を半ば無理やり引き摺るようにして上ろうとする。

けれど純はますます身体を突っ張ってしまうのだ。

「やだ、おじちゃん、ほら、あそこに立ってるよ」

また、おじちゃんだ……。小突きたいのを堪え美月は息子を睨んだ。純はこの家に来てから「おじちゃんがいる」と言ってるように怯えるようになった。何をバカなと思うものの、息子があらぬ方向を指さし固まってしまうとき自分も内心ゾツとしてしまう。この子も幼いながらも環境の変化に戸惑い、海外生活にストレスを感じ変なことを口走っているのかもしれない。それにしたって、こう毎日……。

相変わらず沙希はギャーギャー泣き止まないし、純は固まったまま歩こうとしない。カッと頭に血が上った。

こいつら悪魔だ……。なにが憧れの海外生活だ！ 先週、

会社の奥様会では、みんなやれゴルフだ、英会話だ、オペラだと弾けていたけれど、こつちはこの子たちがいたん

じゃ何もできやしない。駐在生活なんて、オシメ替えて鼻血を拭いているうちに終わってしまうだろう。親の手を借りられるぶん日本にいた方がまだマシだった。半ばやけくそで二階に向かって声を張り上げる。

「ちょっとおじちゃん、いるんなら、ボケーと突っ立ってないで手伝ってちょうだい。こつちは猫の手も借りたくない。さあなきや向こう行って！ 邪魔しないでよ！」

「うわあ、ママ、おじちゃん、なんか言ったよ」

純は逃げ出したかった。でもその手はママにしつかりと掴まれている。そうして連れて行かれる先には「ボブとブルー」に出てくる大工のボブおじさんみたいなおじちゃんが、顔を真っ赤にしてこちらを睨みつけているのだ。

どうしよう、おじちゃん、怒ってるよう。お願いだから怒らせないで、と純はママに頼みたかった。けれどどうせまた嘘つきと言われてしまうだろう。ママなんて嫌いだ。純は泣きたい気持ちで思った。すぐ怒るし、沙希のことばかりをかわいがる。ぼくはいつも一人ぼっちだ。おばあちゃんとおじいちゃんは、どこ？ 会いたいよ。

「うわあ、おじちゃんが動いたあ〜」

純は泣き出し、鼻血をまた噴き出した。

なんなんだ、こいつらは……。

トムはうんざりと、目の前で勝手に修羅場を演じている親子を眺めていた。だいたいこの女は何語を喚んでいるんだ？ 英語がわからないらしいが、ヒステリーにもほどがある。断りもなくずかずかヒトの生活に入り込んできて、我が物顔で振舞ってやがる。彼らに、ここはオレの家なんだ！ と言ってやりたかった。自分も霊生活をして久しいが、うつつとしさにかげちゃこいつらが最悪だ。と思う。

けれど男の子の方は気の毒である。この子にはどうやら自分の姿が見えるらしい。正直に見たものを告げているだけなのに、そのたび母親から叱られ泣いている姿も痛ましい。自分が原因で鼻血まで出し泣きじゃくる男の子を前にしては、さすがに彼も気が咎めた。

仕方あるまい。いずれにしても、こいつらはどうせまだ暫くここに居座るのだろう。だったらこの子とは仲良くすべきなのだ。だが言葉は通じないからな。そうだな、次はフレンドリーに、にっこりと笑ってやるとするか。

人や霊やそれぞれの思惑をよそに、今夜も日が暮れて、日が昇る。それでも日々は続いてゆく。

「うわあ、ママ、おじちゃんが笑った、怖いよ〜」

それぞれの不安や喜び、思いをのせて……。